

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：25201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K01904

研究課題名(和文) インドネシアの服飾に見るグローバル化とアイデンティティ

研究課題名(英文) A Study of Globalism and Identity through Indonesian clothing

研究代表者

塩谷 もも (Shioya, Momo)

島根県立大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：90456244

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、インドネシアを代表する服飾(ムスリムファッションとバティック)のグローバルな展開を、アイデンティティに結びつけながら、現地調査に基づいて具体的・実証的に分析した点である。バティックを活用したアイデンティティ育成の現状と変化、あわせてマレーシアやシンガポールでの展開に関する研究も行なった。

ムスリムファッションについては、イスラーム的な「正しさ」とファッションの間で、バランスを保ちながら、独自のものを生み出している状況を明らかにした。近年の新たな服飾とアイデンティティの動きについても調査から明らかになり、日本との比較も含め、今後の研究発展につながる知見を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的・社会的な意義としては、まずは多民族国家であるインドネシアを対象として、服飾を媒介とし、グローバル化とアイデンティティに関する研究を実施した点である。生活に密着したもので、なおかつ人々のアイデンティティと結びつくものでありながら、必ずしも先行研究が豊富ではなかった服飾に焦点をあて、グローバル化と結びつけて分析した点に、本研究の特徴がある。

国民意識と結びつくバティック、宗教意識と結びつくムスリムファッションという2つの異なるアイデンティティを体現するものを同時に研究し、グローバル化が進行する中でのアイデンティティを考察したという点で、独創性もそなえているといえる。

研究成果の概要(英文)：This study aims to analyze Globalism and identity in Indonesia through clothing. There are two main type of clothing in Indonesia, batik clothing and Islamic clothing. Each type of clothing is connected to a person's national identity and to their religious identity. These clothing are also exported globally. Indonesia's national clothing, the batik clothing are worn in schools and offices to develop their national identity. In recent years, the local government is developing local batik and also started to make rules about wearing local clothing to develop local identity. The number of people wearing Islamic clothing has been increasing since the 2000s. From the field data, it is clear that as Islamic clothes become more diverse and the balance between fashion and Islamic "correctness" becomes an issue. The data reflects Indonesian people's increasing interest in practicing "correct" Islam. This study analyzes identity in Indonesia through clothing in this global era.

研究分野：人文学

キーワード：地域研究 インドネシア 服飾文化 イスラーム ヴェール バティック アイデンティティ

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) インドネシアにおいては、経済的な成長に伴った消費行動の変化が顕著である。その中で、本研究では、特に服飾に焦点をあてる。ショッピングモールなどにおいて、海外ブランドのファストファッションの進出など、服飾のグローバル化が進む中で、インドネシアからは2つの服飾が、グローバルに展開されている。これらの服飾を研究対象とし、アイデンティティとグローバル化に関する研究を実施するのが目的である。

(2) 一つ目は、イスラーム教徒を対象としたムスリムファッションである。世界で最もイスラーム教徒の人口が多いインドネシアにおいて、このファッションの着用者が急増したのは2000年代以降である。ヴェールの着用が一番の特徴として挙げられるが、肌を露出しない服と合わせて着用されるものである。ヴェールについては、先行研究でも世界各地のイスラーム研究の中で扱われてきたテーマである。インドネシアでは、着用者が増加しており、その中でスタイルも多様化している。また、東南アジアから中東にいたるまで、インドネシアのムスリムファッションは世界的に影響を持っている。

(3) 二つ目は、バティックである。もとはろうけつ染めで作られてきた布だが、今ではプリント生地のものも多く作られており、柄でバティックであると判断されることが多い。1945年の独立以降、インドネシアの国民衣装として使われてきた。また、制服用としても広く着られてきた。多民族国家であるインドネシアにおいて、さらに宗教的にも多様な人々を結び付けるものとして、バティックは国民アイデンティティの象徴に重要であった。2009年にユネスコの世界無形文化遺産に登録されたことで、バティックは再評価された。また、バティックは東南アジアや日本でも販売され、遠くはアフリカのファッションにも影響を与えるなど、グローバルなものでもある。

2. 研究の目的

(1) 上記のような研究の背景をふまえて、本研究ではインドネシアの国内外のムスリムファッションとバティックの展開を検討しつつ、同時にアイデンティティの問題について考察することを目的とする。

(2) 本研究では、インドネシアのムスリムファッションとバティックのグローバルな展開について、①作り手、②売り手、③買い手、④情報、の4つに焦点をあてながら、具体的・実証的な研究を総合的に行なう。

(3) グローバル化について、欧米中心でなく、それ以外の地域の動きも含めてアジア・アフリカを対象とし多分野からこの現象を分析した先行研究も参考にしつつ、インドネシアを対象に服飾を通じて、グローバル化とアイデンティティの関連を分析する。バティックとムスリムファッションについては、比較のためにマレーシア、シンガポールの事例も含め、調査を実施する。

3. 研究の方法

(1) 文献調査と資料収集

研究の枠組みを明確にするために、文献調査、資料調査を研究の初期段階で集中的に実施した。そのことを通じて、現地調査の調査項目と内容の整理を図ることを行なった。日本国内で入手可能なものは早い段階で収集し、インドネシアでの現地調査の際には、日本で入手の難しい資料類を入手した。

(2) 現地の研究者との情報交換

インドネシアを調査で訪れた際は、現地の大学や研究所を積極的に訪問し、研究者との情報交換・議論を行うことで、さらに考察を深める試みを行なった。インドネシア科学院、ガジャマダ大学、サナタダルマ大学、インドネシア・イスラーム大学、ムハマディア大学スラカルタ校、スブラス・マラット大学の研究者訪問を実施した。

(3) 現地調査の実施

①平成27年度：インドネシア（ジャカルタ首都特別州、ジョグジャカルタ特別州、中部ジャワ州）において、とくにバティックの作り手と売り手に焦点をあてた調査を実施。

②平成29年度：インドネシア（ジョグジャカルタ特別州、中部ジャワ州）において、ムスリムファッションを中心とした調査を実施し、同時にバティックのマレーシアにおける展開についても聞き取り調査を行なった。

③平成30年度：シンガポールおよびインドネシア（バリ州、西ジャワ州、ジョグジャカルタ特別州、中部ジャワ州）において、ムスリムファッションとバティックに焦点をあてた調査を実施。

④令和元年度：マレーシアおよびインドネシア（ジョグジャカルタ特別州、中部ジャワ州）において、調査を実施。

4. 研究成果

(1) 着用するバティックとアイデンティティ：現地調査の結果、地域ごとのバティックが特産品などを組み込む形で新たに創作され、活用されている現状が明らかになった。これまでバティックは国民アイデンティティの象徴として使われてきたが、現在は同時に地域ごとのアイデンティティを示すものになっている。本来はバティックがなかった地域でも、その土地の布の特色や、特産品などを柄に組み込むことでバティックが作られるようになってきている。こうした新たなバティックは、以前からバティックが作られてきた中部ジャワの工房で、注文を受ける形で作られていることも多い。

一方で、観光で訪れた先のバティックを買う、デザインを優先して他地域のものを好んで着るなど、自分の出身地にこだわらずに着用するバティックを選択している例も見られた。毎週金曜日が職場等でバティックを着る日と決まっており、頻繁に着る機会があることも、様々なバティックを着る背景にはある。

(2) バティックのファッション化：2009年にバティックがユネスコの世界無形文化遺産に登録されて以来、インドネシアにおいてバティックは「モダン」なものと考えられ、人々が着る機会も拡大していることが明らかになった。それまで制服やフォーマルな場に着用する機会に限られており、一時期は「古いもの」ととらえられ、着用者が減少していたバティックが、日常用にも着られるようになってきている。また、若者も着用するなど、バティックに対する意識が変化していることも明らかになった。聞き取り調査の結果からは、バティックがファッションとして用いられるようになった背景には、色の変化がある。白抜きになっていた模様部分に鮮やかな色を入れる、一色で模様が染められていた部分に複数の色を入れる、あるいは新たに淡い色のバティックを作るなどの工夫がされている。また、他のファッションと同様に、バティックの色にも、年ごとの流行が作られるなど、売るための取り組みもなされている。

(3) バティックの海外への輸出：聞き取り調査の結果からは、前述のようにバティックは、古さや時代遅れといったイメージと結び付けられ、ほとんど着られなくなっていた時代がある。中部ジャワのバティック工房が密集する地域を対象とした調査では、その時代に海外への輸出（マレーシア、日本、アメリカ、ヨーロッパ）に踏み切った工房が、複数あることが分かった。

それぞれ輸出対象の国ごとで、受け入れられるデザインや色のものが、作られるようになった。ある工房の代表者は、クリエイティブであることが何より大切だが、同時に何が売れているか市場にあわせることの大切さを語った。バティック工房が隣接する地域では、工房ごとに異なる国や地域を対象としたバティックが作られており、すみわけがされていることも明らかになった。

(4) 海外でのインドネシアのバティック評価：シンガポールとマレーシアで実施した聞き取り調査の結果からは、シンガポールにおいては、インドネシアのバティックは、品質が良くデザイン良いと評価されていることが明らかになった。一方で、マレーシアで売られているインドネシアのバティックは、インドネシアで作られたものであることを語られないことが多い。インドネシアで調査したマレーシアに輸出をしている工房でも、インドネシアでは一般的なデザインである鳥や蝶など生き物のモチーフは、マレーシアに輸出するものでは描かず、色や模様の入れ方も変えていると話していた。そのため、一見するとどちらの国で作られたものかが、分からないようになってきている。

(5) バティックとアイデンティティをめぐる変化：調査の結果、バティックは国を象徴するものとしての意味が変化し、各地方のアイデンティティを象徴するものが作られるなど、変化していることが明らかになった。また、その土地に伝わる布の模様が組み込まれるなど、見て分かりやすいバティックが作られるようになってきている。その土地の特徴的な動植物、特産品、さらにはその土地にあるヒンドゥー寺院などの歴史的建造が組み込まれることもある。バティックを使ってアイデンティティを示すことはインドネシアでは独立後に継続して行われてきたことである。とくに、近年のマレーシアとのバティックの起源をめぐる議論、ユネスコの世界無形文化遺産登録など、グローバルな外からの動きを受けながら、バティックとアイデンティティの結びつきは、より意識されるようになった。

(6) ムスリムファッションの「正しさ」：特に2000年代以降、着用者の増えたムスリムファッションについては、バリエーションが豊かになっている。トルコやモロッコなどの海外モデルを

取り入れた流行も作られている。ファッション化が進む中で、近年では「正しさ」が意識されるようになってきている現状が明らかになった。この「正しさ」への意識は、日常の中での宗教的な正しさを求める動きと連動しており、アイデンティティの表出という点で、重要な研究対象であることがさらに明確となった。

(7) 顔の隠蔽をめぐる変化：近年では、目を除いて顔を覆うチャダルと呼ばれるヴェールの着用者が、以前と比べて増加している。チャダルの色は、以前の黒や茶色などの暗い色のものだけでなく、ブルーやピンクなど様々な色のものが出てきている。チャダルの代用として、マスクで顔を隠蔽する手段が用いられていることも聞き取り調査からは明らかになった。インドネシアのヴェールは、顔が出ているものが一般的で、チャダルやマスクで日常において顔を隠すのは新しい現象である。また、コロナ禍の中で、インドネシアでもマスクの着用が一般的になっている。この現象を受けて、顔の隠蔽に対する意識の変化、チャダルの着用がすすむことはあるのだろうか。今後の研究テーマとして、注目すべき対象であると考えられる。

(7) 「正しさ」への意識と、服飾文化の影響：ファッションナブルでありながら、イスラーム的に正しいとされるファッションが近年は人気を集めるようになってきている。ムスリムファッションの「正しさ」に関する意識は、ヴェールの形や服については、肌の隠蔽の程度、デザイン、生地 にいたるまで多様である。インドネシアは、場にあった服装をすること、制服の規定が細かく決まっているなど、服に関するルールが厳格である。ムスリムファッションの「正しさ」にも、このインドネシアらしさが反映されていると考えられる。

(8) インドネシアの服飾とアイデンティティをめぐる新たな動き：地域ごとのバティックが作られて着られるようになっていくことに加えて、近年では地域に伝わる衣服を現代風に着やすくアレンジしたものが着られるようになってきている。例えばバティックの産地として知られる中部ジャワ州の自治体では、バティックが国を象徴する衣服となった一方で、ルリットと呼ばれる縞模様の織物を使った衣服が、地域の特徴を表す服飾として注目されるようになってきている。

地域ごとの衣服が着られるようになるという変化の中で、今後どのように衣服を通じたアイデンティティが展開されていくのか、分析する必要がある。また、今後の課題として、衣服でアイデンティティを示すことが少ない日本との比較も含めつつ、アイデンティティと服飾について、さらに考察を深めていきたいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 塩谷もも	4. 巻 54
2. 論文標題 インドネシアにおけるバティック布の現状とアイデンティティ	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要	6. 最初と最後の頁 51-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 塩谷もも
2. 発表標題 The Meaning of Veiling in Contemporary Indonesia
3. 学会等名 シンポジウム「ムスリム女性のヴェールをめぐる学際研究」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 塩谷もも
2. 発表標題 多様なムスリム・ヴェールが伝えるもの インドネシアの事例から
3. 学会等名 シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 信田 敏宏、綾部真雄、岩井美佐紀、加藤剛、土佐桂子、塩谷もも、青木武信、青山亨、青山和佳、赤嶺淳、東佳史、阿部健一、阿部朋恒、新井和広、荒木亮、阿良田麻里子、飯國有佳子、飯島明子、伊賀司、池上重弘（他）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 832
3. 書名 東南アジア文化事典	

1. 著者名 Ikuya TOKORO, Hisao TOMIZAWA, Yumi SUGAHARA, Yasuko KOBAYASHI, Momo SHIOYA, Yukako YOSHIDA, Shamsul A.B., Naoki SODA, Yuji TSUBOI, Nao KANEKO, Jacqueline PUGH-KITINGAN, Nobutaka SUZUKI, Keiko KURODA, Ryoko NISHII, Hisashi OGAWA, Omar Farouk	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies	5. 総ページ数 341
3. 書名 Perspectives from Indonesia, Malaysia, the Philippines, Thailand, and Cambodia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考